HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	偽装するハロルド : 氷山の中のクローゼット
Author(s)	瀬名波, 栄潤
Citation	ヘミングウェイ研究, 21, 93-104
Issue Date	2020-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/86194
Type	article
File Information	senaha_Hemingway_21_93-104.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　文

偽装するハロルド
ー 氷山の中のクローゼットー

瀬名波 栄潤

はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway）の『われらの時代に』(*In Our Time*, 1925）に所収された「兵士の故郷」（“Soldier’s Home,” 1924）は，主人公ハロルド・クレブス（Harold Krebs）が自らのホモセクシュアリティを偽装する物語だ。本作品については，これまで多くの批評家が嘘をテーマ軸に，作家ヘミングウェイの実体験や戦争及び故郷の実態を比較検証し真相を究明しようとしてきた。しかしながら，この作品の最大の嘘は，ハロルドが自らの性的指向を偽装し続けることである。つまり，本作品はゲイがクローゼットに幽閉される物語なのである。

ハロルドは，自身の性を隠蔽するために人生を捧げてきた。彼の学歴，戦争，故郷といった外の世界は全て，自らがクローゼットの中に潜むための偽装の場に変容する。そして，当時の性的少数者がそうであったように，ハロルドは故郷を捨て都市へと避難する。まるで，自らの性的指向を隠し続けることがクローゼットの中でも外でも複雑すぎると悟ったかのように。

本稿では，クイア論の観点から，自虐的に偽装するハロルドを解明する。論点は，主人公の性的指向を示す明確な根拠の有無であろう。異性愛規範を前提とした世界で，同性愛は極めて曖昧で読み過ごされかねない。2011 年，『欲望を読む—作者性，セクシュアリティ，そしてヘミングウェイ』（*Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*, 1999）の著者デブラ・A.・モデルモグ（Debra A. Moddelmog）と私信を交わした際，彼女は同性愛を読み解き読者を説得することの難しさをイヴ・セジウィックに言及して説明してくれた。

> Eve Sedgwick has pointed out that there are many ways in which the homoerotic or homosexual component of a text can be downplayed or even ignored because we demand so much evidence of that type of

> desire, much more than we would demand if we were looking for signs of heterosexuality. (n.p.)

解決策は，歴史社会的コンテクストで作品を精査することだという。[1]「兵士の故郷」においてもそうだ。異性愛的 “sign” に傾注する読者が多い中，20 世紀初期のセクシュアリティ文化に照らし合わせて，同性愛的 “sign” を丁寧に発掘する。すると，水面下に氷山の 8 分の 7 が潜むように，アンダーグラウンドな世界が姿を表してくる。

1. 両立する性

ヘミングウェイの同性愛嫌悪は有名だ。その彼が,「兵士の故郷」を “the best story I ever wrote” と自賛した。[2]その理由の一つは，同性愛者ハロルドの性を氷山の理論で包み隠し，まるで異性愛者の物語のように偽装しているからだと言える。

「兵士の故郷」の主筋を精査すると，クローゼットの中と外を往来するハロルドの姿が見えてくる。まず，作品の冒頭で紹介される 2 枚の写真だ。

> Krebs went to the war from a Methodist college in Kansas. There is a picture which shows him among his fraternity brothers, all of them wearing exactly the same height and style collar. …
>
> There is a picture which shows him on the Rhine with two German girls and another corporal. Krebs and the corporal look too big for their uniforms. The German girls are not beautiful. The Rhine does not show in the picture. (111)

多くの批評家は「メソジストカレッジ」に着目し，19 世紀以降，宗教系大学が多く誕生したことや，ヘミングウェイ家の宗教的背景を論じ，ウブな主人公の学歴をノスタルジックに解釈してきた（Smith 68-74）。つまり，ハロルドは戦争に行くまでは，真面目で敬虔なキリスト教信者だったが，戦争で変わってしまったという考えだ。ハロルドの堕落ぶりは，2 段落目で，もう 1 人の伍長と 2 人のドイツ人女性が，ライン川を背景にしているにもかかわらずライン川を映さずに撮られた写真で証明されたことになっている。

この対照的で矛盾する不可解な 2 枚の写真は，生真面目なハロルドの変容ぶりを証明するものとされてきた。が，同性愛者であることを前提に読むことで，一貫した風景として描かれていることがわかる。

1 枚目の鍵はフラタニティ文化だ。「フラタニティ」は，男同士の絆を強める女人禁制の同好会として 19 世紀に大学で誕生し，1890 年代から 1920 年代にかけて発達した。

> Fraternity expanded dramatically from the 1890s to the 1920s. College students were not alone in this rush to fraternalism, as hundreds of thousands of American men, anxious about the perceived female influence in American culture and experiencing what some historians have termed “crisis of masculinity,” joined all types of societies. … For white males, fraternity membership increasingly became a way to identify American manhood with whiteness and Protestantism. … Fraternity men identified themselves as “Greeks,” associating their manliness with a cultural and civilized historical past and berating their nonfraternity classmates as less manly “barbarians.” (Carroll, 178-79)

フラタニティのミッションは，アメリカの男らしさを創造すること。そして，白人でありプロテスタントであることを前提とし，同時にそのルーツを古代ギリシアに遡ることで，自らの出自を公に正当化した。1920 年代には，男子学生の 11.74% がフラタニティに加入し，卒業後の就職やネットワーク形成に多大な影響を与えていたという（Syrett 207）。ハロルドにとって，フラタニティに入ることは自らを異性愛世界で主流化させる行為だった。

しかし，このフラタニティは同性愛指向を持つ者の秘密結社でもあった。フラタニティと同性愛の共存関係は，20 世初頭にはすでに指摘されていたからだ（Syrett 207）。中でも，カンザス大学では，二つのフラタニティが同性愛者の天国になっているという噂が流れていた（Syrett 268-69）。ハロルドが学んだ「カンザスの大学」がどこなのかは不明だが，ヘミングウェイは『カンザス・シティー・スター』紙での記者体験を通して，同性愛文化が中西部に育ちつつあったことを知っていたのだろう。故に，オクラホマのクレブス家には同紙を購読させ，ハロルドをカンザスの大学に進学させた。偶然の一致とは言い難い。いずれにせよ，ハロルドのフラタニティ加入には両義性が出てくる。一つは，異性愛者として偽装し，公的には正統なキャリア構築に加わっていたこと，もう一つは同性愛者コミュニティで秘密の連帯を築いていたことだ。クローゼットの中と外で，ハロルドは両立していたのである。

2 枚目の戦時のドイツで撮影した写真も，ハロルドの性的指向を両立して映し出している。それは 2 組の男女が一緒に写っていることから，異性愛世界のように見える。しかし， 4 人が本当に 2 組の異性愛

カップルだったかは不明だ。女性が「美しくない」ことがわざわざ示され，観光名所のライン川が写っていないのは不自然だ。これには，ドイツ人女性たちが売春婦だったという多くの批評家の説に加え，「もう 1 人の伍長」はハロルドのパートナーだったという推論が浮かび上がる。ハロルドは，異性愛者を演じつつ，「もう 1 人の伍長」との大切な思い出を記念写真に残したのだろう。2 人とも同じ体型をしていたことからも，軍人としてまた恋人として衣食住を共にしていたと考えられる。ハロルドは，戦争中も自らの性的指向を上手に演じ分けていたのだ。事実，その後，ハロルドは “On the whole he had liked Germany better. He did not want to leave Germany.”(113) と胸の内を語り，同性愛に寛容なワイマール文化が花開くドイツが特別な場所だったことを告白している（Gordon 1-18, Mosse 23-47）。

帰郷したハロルドには危機が迫る。まずは，街の人々に戦争について嘘をつかないといけないことだ。遅れて帰郷したこと，すでに多くの嘘が他の兵士によって語られていたことで，ハロルドは真実を誇張した嘘で自らを塗り固めなければならなくなる。

一般的に，カミングアウトしない多くの性的少数者は，異性愛世界で自らを欺くため，望まぬ嘘にまみれた人生を送り苦悩すると言われている。ハロルドも，兵士としてさらなる嘘を強要され自己嫌悪に陥る。ただ，ダンスパーティーの更衣室では，同性愛者ハロルドの本来の姿が見えてくる。ハロルドが時折会っていた男の存在だ。

> Krebs acquired the nausea in regard to experience that is the result of untruth or exaggeration, and when he occasionally met another man who had really been a soldier and they talked a few minutes in the dressing room at a dance he fell into the easy pose of the old soldier among other soldiers: … (112)

ハロルドの “easy pose” にヘミングウェイ自身の足の戦傷を連想する伝記批評家がいる。しかし，クイア論的観点からテキストに着目すると，ハロルドが更衣室という限定的な空間の中で，2 枚目の写真の中の「もう 1 人の伍長」同様，「本物の兵士だったもう 1 人の男」と逢瀬を繰り返し，連帯感を得ていたという点でも重要だ。ハロルドの安楽の地は，更衣室という男だけの世界において生まれ出てくるのだ。

ハロルドは，街で唯一変わったのは成長した女の子たちだけだったと好意的に受け止める。そのため，意識過剰なほどに “liked” を多用し，異性愛者のような眼差しを彼女らに向ける。が，“They were too complicated.”（112）と女性との接触を避ける。そして，彼女たちが Greek Ice Cream Parlor にいるのを目撃した瞬間に寛容さは消える。大

学時代にフラタニティー，つまり Greek に所属していたハロルドにとって，Greek は聖域であり，それがたとえアイスクリームパーラーであっても，Greek と名が付く場に女が侵入することは許せない。ハロルドにとって，Greek は大切な男の園なのだ。今度は “didn’t want” を繰り返し，求愛は偽りごとであり，価値のないことだと本音を吐く。

> He did not want to have to do any courting. He did not want to tell any more lies. It wasn’t worth it.
>
> He did not want any consequences. He did not want any consequences ever again. He wanted to live along without consequences. Besides he did not really need a girl. The army had taught him that. It was all right to pose as though you had to have a girl. Nearly everybody did that. But it wasn’t true. You did not need a girl. … (113)

ハロルドの意識の根底には，同性愛者としての女性回避がある。それは，再度 “liked” を繰り返すことで異性愛者への復帰を試みるも，すぐに女性は必要ないと絶縁宣言することで明らかだ。しかも，その直後に，同性愛者が異性愛者のように振る舞うことの矛盾と滑稽さに気づき “That was the funny thing”（113）と自嘲する。だが，その次の段落では “lie” をいきなり多用し，自戒するように，女性の必要性について自己問答を繰り返す。結局，“That was all lie. … It was all a lie both ways”（113）と世の中も自身も虚像であることを悟る。しかしながらハロルドは，“You didn’t need a girl unless you thought about them.”（113），つまり「よくよく考えると女は必要だった」と悟り直し，異性愛規範の歴史に屈するように “Then sooner or later you always got one”（113）と異性愛者としての自らの人生を自虐的に受け入れることにする。ハロルドのアンビヴァレントな意識の流れは，軍隊でも故郷でも結局は異性愛者として偽装する生活を送る覚悟に至るのだ。

ハロルドにとって，最大の難所は母親だ。母親は，ハロルドの同性愛指向に気づいているかどうかは不明だが，彼の現状に明らかに不安を感じており，異性愛規範の中で幸福を追求するよう説得する。父親はテキストには登場しない。そこには，同性愛者の家庭にある「理解できずに動揺する母親と，理解しようとしないで接触を断つ父親」の典型的構図が見えてくる。

それを端的に示す一つが，アメリカの自動車文化だ。1920 年代，若者の間では自動車はデートの必須品だった。自動車はプライベートな空間を作り出し，デートのための移動手段としてだけではなく，カーセックスの場へと転用された（D’Emilio and Freedman 240）。したがって，地方では，車なしで交際相手を獲得するのは至難の技だった（D’Emilio

and Freedman 259)。もっとも，幸運なことに，出兵前のハロルドは自動車の運転を父親に許されず，この異性愛を後押しする自動車文化からは遠ざけられていた。が，しかし，帰郷後のある朝，「理解できずに動揺する母親」は，父親の言葉を借りて息子を救おうとする。夜なら使ってもいいという許可を得たというのだ。地域の評判を気にする不動産業を営み保守的価値観の持ち主である父親は，今やそれを容認すると母親に伝えたとしている。もちろん，それが事実かどうかは不明であり，ハロルドは "I'll bet you made him"（114）と母親を疑う。

ヘミングウェイは，自身のセクシュアリティ故に心を固く閉し身構えるハロルドを，"Krebs looked at the bacon fat hardening on his plate" (115) とハードボイルドに描写する。母親は，異性愛規範の道標である「誕生・結婚・出産・長命」を息子に期待し，女性の恋人を得て，結婚し，仕事を見つけ，一角の人間になることを希望する。

> "Your father is worried, too," his mother went on. "He thinks you have lost your ambition, that you haven't got a definite aim in life. Charley Simmons, who is just your age, has a good job and is going to be married. The boys are all settling down; they're all determined to get somewhere; you can see that boys like Charley Simmons are on their way to being really a credit to the community."
>
> Krebs said nothing. (115)

彼女は諦めず，今度は "Don't you love your mother dear boy?" (116) と母性に訴える。対して，ハロルドは母親が望む異性愛主義を受け入れることはできず，"I don't love anybody" (116) と拒絶する。もちろん，この本音が母には届かないことを知っているハロルドは，"I was just angry at something" (116) とその場を取り繕うとするが，母親は大きく泣き崩れる。結局ハロルドは，"I'll try and be a good boy for you." (116) と母親に妥協するふりをする。

最後の手段として，母親は宗教に救いを求める。ハロルドはまたしても拒絶する。キリスト教は異性愛規範の基盤となる宗教だからだ。メソジスト派の大学で学んだとは言え，ハロルドは自ら祈ることを拒否し，母親に祈らせる。母親に感謝のキスをするが，これは明らかに偽装行為だ。そして耐えかねたハロルドはついに家を出る決心をする。

物語は，ハロルドがカンザス・シティに向かうところで終わる。20世紀初期には，ゲイやレズビアンが自由を求めてアメリカの大都市に集まり始めていた（D'Emilio and Freedman 228，290-91)。ヘミングウェイの故郷オークパークのすぐ近くにあるシカゴやミズーリ州のセントルイスは，同性愛者が集う街としてすでに有名だった。そして，40

年代に入ると，カンザス・シティにもゲイバーが開店し，同性愛者の聖地として認知されるようになる（D'Emilio and Freedman 291）。作品の背景や執筆の時期である 1920 年前後には中西部を代表する大都市であったカンザス・シティが，ゲイが集まる都市として発展途上にあったことは容易に想像できる。故郷オクラホマは，ハロルドにとって自らの性的指向をクローゼットの中に閉じ込める場であった。対して，カンザス・シティは，彼が自分らしく振る舞うための最も近い憧れの目的地だった。

2. 孤立する性

「兵士の故郷」には，主筋の他に，異性愛規範や伝記的批評では説明不可能で不必要に思われる挿話が組み込まれている。これらは，ハロルドの同性愛指向を端的に示すものであり，ハロルドを知る上で不可欠な逸話である。結果，ヘミングウェイが創り出した氷山と言うクローゼットの中に , 孤立するハロルドの実像が透けて見えてくる。

一つ目は「クラリネット」である。ヘミングウェイは唐突に "In the evening he practiced on his clarinet" (112) という文章を挿入する。これをヘミングウェイの家風でもある音楽との関わりに着目すると，母親が音楽家を志していたこと，姉の Marcelline は父の母校であるオーバリン大学音楽学部に進学したこと，妹 Sunny はメンフィス交響楽団でハープを奏でていたことを伝記的根拠とすることができるし，ヘミングウェイ自身も高校ではグリークラブに所属し合唱を，また同時にオーケストラ部ではチェロを演奏していたことを理由としてあげることができる (Tyler 136-43)。ハロルドが楽器を嗜むことは，ヘミングウェイにとって自然な選択だったのかもしれない。では，なぜ，歌やチェロの練習ではなく，クラリネットなのだろうか。

クラリネットの形状が男性器を連想させることから，ハロルドは夕方にオーラルセックスを夢想しているというフロイト的な解釈も，短絡的ながら可能だろう。それ以上に興味深く説得力があるのは，同性愛者擁護雑誌『アドボケート』(*The Advocate*) に掲載された記事だ（Mubarak n.p.）。それによると，広告会社に勤めるマーク・ストゥーナー氏が「非科学的ではあるけれども自分なりに 20 年間しらみつぶしに調査」した結果，クラリネットとゲイの相関関係を発見したというのである。彼によると，「幼児期にクラリネットを演奏していた男の子の 4 人に 3 人はゲイになった」という結果が出たとか。通常，「男子はトランペットを吹きたがるのだが，繊細な男の子はクラリネットを選ぶ傾向にあり，それが私たちゲイである」と結論づけている。ハ

ロルドもその 1 人だろうか。クラリネットは，同性愛者にとって無意識のカミングアウト楽器だったのだろうか。ヘミングウェイは何を理由にクラリネットをハロルドに吹かせたのだろうか。少なくとも，ヘミングウェイの家風よりもハロルドの性的指向の方に説得力がある。クラリネットは，彼の同性愛を明かす道具だ。

もう一つの挿話は，ハロルドと妹ヘレンの会話だ。以下を読むと，実の兄妹でありながら，2 人は恋人同士のように読める。

> “Couldn’t your brother really be your beau just because he’s your brother?”
> “I don’t know.”
> “Sure you know. Couldn’t you be my beau, Hare, if I was old enough and if you wanted to?”
> “Sure. You’re my girl now.”
> “Am I really your girl?”
> “Sure.” (114)

2 人の妹にとって，ハロルドは英雄だと書かれている。特に，ヘレンにとってハロルドは自身の将来を左右するほどの特別な存在であり，2 人の関係は謎に満ちている。これをウブな妹の純粋な愛情表現と捉えるのは無理がある。なぜなら，この会話が醸し出すのは近親相姦だけではないからだ。

その謎を解く一つ目の鍵は，ヘレンの性自認と性的指向だ。インドアベースボールでピッチャーを任され，チームの女の子は下手だと見下し，自分はたいていの男の子よりも上手だと自慢するヘレン。クローゼットを連想させるインドアのベースボールで満足できないでいるヘレンの身体能力は男以上であり，内面も典型的な異性愛指向の女性のようではない。つまり，ヘレンは生物的には女性だが性自認が男性であるトランスジェンダー，つまり Female to Male（FtM）である可能性がある。しかも，そのヘレンが兄の恋人になりたいと主張するということは，ヘレンの性的指向はゲイだということになる。つまり，ヘレンは（近親相姦だけでなく）既存の性規範を性自認や性的指向においても超越していると言える。クローゼットの中に平穏を求めるハロルドとは対照的に，ヘレンは興奮気味に兄を説得する。“my girl” となだめすかすように妹の願望を受け入れるハロルドの様子からして，2 人はクローゼットに潜む者同士として，互いの性について暗黙の了解と絆を築いているようだ。

兄妹の謎の関係を解くより確かな二つ目の鍵は材源だ。この挿話は，単にヘミングウェイが思いついたのではなく，彼の恩師であり当

時はレズビアンとして知られていたガートルード・スタイン（Gertrude Stein）の「ミス・ファーとミス・スキーン」（“Miss Furr and Miss Skeene”）に依拠していると思われる。1923 年，『ヴァニティ・フェア』（*Vanity Fair*）誌の 7 月号に掲載されたこの短編は，既婚者ミス・ヘレン・ファーと愛人ミス・スキーンの自由奔放な生活を描いたレズビアン物語だ（Behling 127-29）。この短編では，スタインの「スタイニーズ」と呼ばれる繰り返しの表現技法が駆使されている（Leick 86-87）。当時はアンダーグラウンド用語だった「gay」という言葉が多用され，2 人が「美しい声」の訓練を過度に行なっていたことが執拗に語られる。[3]

ただ，本稿でより重要なのは，この「ミス・ファーとミス・スキーン」のパロディ版広告短編が，「兵士の故郷」執筆の半年前の 1923 年 10 月号に，同じ『ヴァニティ・フェア』誌に掲載されていたことだ。パロディ版広告短編は “When Helen Furr Got Gay with Harold Moose” と題され，ゲイなヘレン・ファーは陰鬱なハロルド・ムースと結婚，しかし彼女があまりにもゲイなので，ハロルドはある日，杖で彼女の頭を殴りつけ，「俺はお前よりもゲイで，世界で一番ゲイな『ヴァニティ・フェア』誌を定期購読するぞ！」と宣言するという暴力的な結末だ。この K.D. という匿名の人物によって書かれた広告短編は「レズビアンの妻を夫が罰することで異性愛読者を獲得する」ことが目的だったという（DuPlessis 21）。スタインの「ミス・ファーとミス・スキーン」を反転させたテーマだ。が，しかし，K.D. の作品は，自分が同性愛者であることを公言しているオープンリー・レズビアンのヘレンに対し，自らの同性愛指向を抑えてクローゼットに身を潜めていたハロルドがついに自らの性的指向を公言する物語でもある。ハロルドはゲイであることを自認するからだ。これは，結局ムース家の夫ハロルドと妻ヘレンの双方が同性愛者であることを認める，つまり再反転するオープンな同性愛者の物語なのである。この構図が，「兵士の故郷」に登場するクレブス家の兄ハロルドと妹ヘレンの偽装結婚願望へと投射されている。

ヘレンとハロルドの「インドア」な関係は意味深長だ。20 世紀初期の同性愛文化の公然性と秘匿性のジレンマを 2 人の物語は映し出しているからだ。“He had tried so to keep his life from being complicated.” (116) とあるように，ハロルドは，複雑な故郷でクローゼットに自らを包み隠すことに成功していたが，結局は故郷に留まり続けることを諦め，自ら退く決意をする。そして，同胞とも呼べる妹ヘレンに敬意を払うためにインドアベースボールを観戦に行った後，複雑ではないスムーズな生活を求め，都市での自由を獲得するためにカンザス・シティーに 1 人旅立つことにするのだ。

ヘミングウェイは，「ミス・ファーとミス・スキーン」をパロディー

化した “When Helen Furr Got Gay With Harold Moose” に発想を得て，「兵士の故郷」を書いたのだろう。パロディ版と同じ名前のハロルドとヘレンを用いることがその証だ。ヘミングウェイは，同性愛者間で異性婚を偽装する「友情結婚」を近親相姦に転写することで，ハロルドやヘレンだけでなく，同性愛者スタインをも揶揄したのかもしれない。

むすび

「兵士の故郷」は，同性愛を描いた作品だ。クイア論の観点から登場人物たちの言動を精査すると，主筋と挿話が相乗的に絡み合い同性愛を一貫して描いていることがわかる。ハロルドは，クローゼットの中と外を行き来し，自虐的に偽装する同性愛者なのである。

ホモフォビアの作家ヘミングウェイは，ハロルドがゲイであることを生涯認めなかった。自らが創造した世界で，異性愛世界と同性愛世界でさまよい両立と孤立を繰り返すハロルドの姿を描き，消えていく運命を与えたのだ。つまり,「氷山の理論」を駆使し，一貫してハロルドのカミングアウトを許さなかった。だからこそ，“the best story” と自画自賛したのだろう。

ヘミングウェイは,「兵士の故郷」で同性愛を題材にして，主人公ハロルドを冷たい氷山の中に閉じ込める。対して，本稿はその氷山を砕き，ハロルドの実像を可視化するアウティング批評と言える。『われらの時代に』には，クイアな解釈を待ち望む作品が他にも潜んでいる。氷山に埋もれたクローゼットから登場人物を救出する研究は今後も必要だろう。

註

＊ 本投稿論文は , 2019 年度日本ヘミングウェイ協会第 30 回全国大会（11 月 16 日 , 於：杏林大学井の頭キャンパス）にて口頭発表した「偽装するクレブス：クローゼットの中と外の故郷」に加筆修正したものである。司会を務めた古谷裕美氏並びに大会関係者の方々,そして貴重なご意見を賜った会場の皆様に厚く御礼申し上げる。また,掲載にあたって有益なコメントをくださった編集委員会委員並びに選考委員諸氏に心から感謝の意を表する。

[1] “One of the things we can do is to carefully consider the historical and social context in which the story is set. This is what I try to do in my book, where I note that Hemingway lived during a time when words like ‘homosexual’ and ‘heterosexual’ were coming into existence through the work of the sexologists who constructed a

'homosexual' identity that carried with it suggestions of abnormality or pathology (at worst) and aberration or anomaly (at best). With the introduction of such an identity, relations that had once been viewed as homosocial now began to be viewed with suspicion, and men had to adjust their behavior when in the company of other men in order not to be 'read' as homosexual. So interesting readings can be done that tease out the new meanings of the line between homosexual and homosocial that arose in the early twentieth century." (Moddelmog)

[2] ヘミングウェイの「兵士の故郷」批評史についてはレーナ・サンダーソン（Rena Sanderson）15，カーロス・ベイカー（Carlos Baker）139，ジェームス・R・メロウ（James R. Mellow）168，同性愛嫌悪についてはウーナ・W・フェイ（Una W. Fahy）60-61，318 参照。

[3] この材源だけだと，「兵士の故郷」よりも「エリオット夫妻」（"Mr. and Mrs. Elliot," 1924）が思い浮かぶ。ミス・ファーはミスター・ファーと結婚しており，エリオット夫妻の新婚生活に入り込むコーネリア・エリオットの同性パートナーの物語と酷似しているだけでなく，2 人は "many a good cry" を発するからだ。ヘミングウェイは，スタインのこの作品に着想を得て「エリオット夫妻」というレズビアン物語を書いたと思える。

Works Cited

Baker, Carlos, ed. *Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961.* 1981. Scribner, 2003.

Behling, Laura L. *The Masculine Woman in America, 1890-1935*. U of Illinois P, 2001.

Carroll, Bret E, ed. *American Masculinities: A Historical Encyclopedia*. Sage, 2003.

D'Emilio, John and Estelle B. Freedman. *Intimate Matters: A History of Sexuality in America*, 3rd ed. 1988. The University of Chicago P, 2012.

DuPlessis, Rachel Blau. *Gender, Races, and Religious Cultures in Modern American Poetry, 1908-34*. Cambridge UP, 2001.

Fahy, Una W. "Learn How Interpersonalized Homophobia Is Harmful." *How to Make the World a Better Place for Gays and Lesbians*. Warner Books, 1995. 12-16.

Gordon, Mel. Voluptuous Panic: *The Erotic World of Weimar Berlin*. Feral House, 2006.

Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigia Edition*. 2003. Scribner, 1987.

Leick, Karen. *Gertrude Stein and the Making of an American Celebrity*. Routledge,

2009.

Mellow, James R. *Hemingway: A Life Without Consequences*. Da Capo P, 1993.

Mubarak, Dahir. "Why Are We Gay?" *The Advocate* (The national gay & lesbian newsmagazine) July 17, 2001. (https://www.questia.com/magazine/1G1-76577630/why-are-we-gay).

Moddelmog, Debra A. "RE: Nice to see you." Received by Eijun Senaha, 22 Dec. 2011.

Mosse, George L. *Nationalism and Sexuality: Respectability and Abnormal Sexuality in Modern Europe*. 1985. Howard Fertig, 1997.

Sanderson, Rena, ed. "Hemingway's Italy: Paradise Lost." *Hemingway's Italy: New Perspectives*. Louisiana State UP, 2006. 1-37.

Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. G. K. Hall, 1989.

Syrett, Nicholas L. *The Company He Keeps: A History of White College Fraternities*. North Carolina UP, 2009.

Tyler, Lisa "Opera, Maternal Influence, and Gender in Ernest Hemingway's 'The Ashe Heel's Tendon'." Ed. Robert P. McParland. *Music and Literary Modernism: Critical Essays and Comparative Studies*. Cambridge Scholars Publishing, 2009. 136-43.